

優秀賞

## 地域民話研究部門（団体）

# おたちきさん

## ～なぜ、五百年以上祀られ続けてきたのか？～

愛媛県立西条高等学校  
地域・歴史研究部  
(高橋陽佑、玉井勇伍)

### 応募の動機

このコンテストのを知り、ぜひ自分の故郷である西条市のことについて研究して応募したいと思った。また、コンテストを通じて多くの人に西条市のことを知ってもらいたいという気持ちもあった。さらに、自分の研究を応募することで評価やアドバイスが頂けるよい機会だと考えた。

### 研究レポート内容紹介・今後の課題

「おたちきさん」。私の住む西条市のことを調べている際に読んだ『西条の民謡と伝説』で紹介されていた西条市釜の口地区の“伝説”の一つである。石川源太夫と隣の領主である黒川氏との間で起こった戦での活躍により、黒川側は城を落とせずにはいた。そこで、黒川側は石川源太夫に対して策略を用いて誘い出して暗殺するにいたった。石川源太夫はとても人徳があったため、付近の農民が石川源太夫の死を悲しむとともに、その武勇を讃えて「おたちきさん」と呼んで祀り始めたそうである。

私が読んだ『西条の民謡と伝説』によると、愛媛県西条市内にある釜の口という地区に祀られていると記されていた。そこで、実際に釜の口地区を訪ねて自治会の方からお話を伺い、集会所の2階にある神棚が「おたちきさん」を祀ったものだということが分かった。慰霊祭を毎年7月頃に行っており、後日参加させていただいた。隣の木挽原（こびきわら）地区にも祀られており、祀る場所が複数存在していることから、地元の「民から尊敬されていた」ということは事実のようだ。

次に、「石川源太夫」のことについて調べた。方法としては、文献調査を中心にフィールドワークなどを行った。様々な書籍から石川源太夫という名前が確認でき、実在の人物であることが分かった。勇猛果敢で知恵が優れた人物だったことはどの文献も一致しており、事実だと考えていいだろう。なぜ、勇猛果敢で知恵が優れ民衆からも尊敬されていた「石川源太夫」は暗殺されてしまったのだろうか。そこで、死の真相についてその経緯を調べたところ、文献や資料によってさまざまな経緯が確認できた。例えば、「石川源太夫」が戦に負けそうになった時に、彼が立て籠もる城を落とすために敵方の手によって暗殺された説や、「源太夫」が氷見高尾城の城主になった後に奢りの心が出たので暗殺された説など様々であった。このように人徳があったが無残にも暗殺されてしまった石川源太夫の死を地域の人々が悲しみ、その勇敢さをたたえ「おたちきさん」として祀り、今に繋がっている。以上が、現段階での調査の成果である。

今後の課題としては、審査をしてくださった先生方から頂いたアドバイスをもとに、文献調査などをさらに進め、「おたちきさん」として祀られた経緯や複数祀られている理由などの考察を深めていきたい。そして、研究成果を釜の口地区の方々にも披露したい。



釜の口集会所での聞き取り



木挽原にある「おたちきさん」を祀る神社

優秀賞

## 地域民話研究部門（団体）

# 民間に根付く妖狐妖狸伝

群馬・高崎商科大学附属高等学校  
社会部特選・特進男子

（大塚蒼太、青柳忠矩、新井千寛、土屋貴博、  
狩野貫太郎、坂本蒼輝、秋山幸輝、霞拓真）

### 応募の動機

私たちが本コンテストに作品を応募した理由は二つあります。

一つ目は、昨年のコンテストで優秀賞を受賞した部活の先輩方に続き、私たちの代でも賞をいただきたいという思いから。

二つ目は、私たちの郷土に伝わる伝説、伝承の研究を私たちの間だけでなく、より多くの人に知ってもらい共有したいという思いからです。

### 研究レポート内容紹介・今後の課題

私たちは「民間に根付く妖狐妖狸伝」というテーマで研究を進めてきました。まず私たちが注目したのは群馬県館林市にある曹洞宗茂林寺に伝わる「分福茶釜」の伝説です。茂林寺が地元群馬県にあるということもあり、私たちは実際に茂林寺に行き調べてみることにしました。まずは伝説の内容を簡単に紹介します。

昔、茂林寺の寺の和尚が森で狸を助けた。その狸が茶釜となって化けて出て、それを見世物としたところ、噂は各地に広がり大繁盛した... というのが一般的に知られている分福茶釜の話ですが、茂林寺の見学や書籍で調べてみたことからこれには元となった話があり、それは江戸時代に平戸藩主の松浦静山によって書かれた甲子夜話だということまで調べました。

狸などの動物が化けるということや、それに似た伝承はないかとさらに調べていくと、私たちは「日本三大狸伝説」なるものが存在することを知りました。そして私たちはそのうちの一つである「証誠寺の狸囃子」について調べようと思ひ、千葉県木更津市にある証誠寺について調べることにしました。

証誠寺に伝わる狸囃子の伝説は、民謡「証誠寺の狸囃子」のモデルとなり、その民謡の舞台になったのもこの寺だということがわかり、さらに研究の幅が広がりました。

さらに調査を続けた私たちはさらに類似の伝説が身近にないかと思ひ、書籍で調べていくうちに私たちが住む市内や群馬県各地にも多く存在することがわかりました。どの伝承でも狸や狐が何かほかのものに化けたり、人間をだましたり憑依するものがほとんどでした。

このような物語のルーツをたどるととても古い歴史があり、日本では日本書紀（奈良時代）や日本霊異記（平安時代）にも記されていることがわかりました。このような物語のはじまりは中国であるといわれていて、古いものでは紀元前 1100 年頃の殷王朝の王の妻である妲己に狐が化け王を惑わせたという伝説も残っているようで、古代より人々の生活に狸や狐の存在が浸透していることがわかります。

私たちは、なぜこのような狸や狐に関する物語や伝説が生まれたのかを、人々の生活や風習、信仰や当時の時代背景などから私たちにに考察し、結論に至ったのがこの研究の内容となっています。



茂林寺本堂



証誠寺の「狸塚」

# 「あくねの なな 不思議なおかし」 ～阿久根の七不思議を調べて～

鹿児島県立鶴翔高等学校  
郷土芸能同好会  
(有田詩文、黒岩詩音、河野真有、平田文)

## 応募の動機

鹿児島県阿久根市は、観光客が少なく、衰退の一途をたどっている。最近では、イベントや名産品を生かした新たな商品開発やブランドショップを立ち上げ、いろいろな地域活性化策が講じられている。私たちも地元の活性化のために、「阿久根の七不思議」を題材にお土産やイベントを提案し、地元の活性化の手助けができないかと考えた。

## 研究レポート内容紹介

### 阿久根の七不思議（阿久根七奇）とは

『三国名勝図会』によると「阿久根村の中に、奇妙なものが七つある。よって土地の人は七奇と称した。」とある。その他の郷土資料も調べた上で、実際に七不思議を見て回った。

(1) 光礁（ひかるぜ）

輝く光の色は、白銀を溶かしたような色で、外国人が海底にダイヤモンドが隠されていると考えて探したという。実際、本当に海底に黄金が埋まっているのではないかと思わせる岩であった。

(2) 隔丘（おかごし）の塩田

この塩田では、明治末期まで盛んに塩造りが行われてきた。伝説によると旅の僧によって製塩法を教えられたという。潟と呼ばれる湿地帯にあったが、近年は住宅地となっている。

(3) 天狗（大人：おおひと）の足跡

天狗が対岸の島へ跳ぼうとして、大岩に足跡が残ったという。実際、足の跡がくっきりと残っていた。

(4) 岩船

丹後の国を出た船が、現在の折口川の河口近くの砂浜に乗り上げたという。川の護岸工事が原因で、砂で埋まってしまったという。実際は、砂浜の中に小山ができていた。

(5) 佐潟の洞窟（小潟崎穴）

内部が3方向に分かれており、それぞれが行き止まり。昔の穴住居とも言われている。今も見にいけるが、岩や木がたくさんあり、波も高い時もあるので注意して行くべきだ。

(6) 尻無川

弘法大師が村人に大根を所望したところ、与えなかったため川の水が絶えてしまったという伝説がある。実際、河口には大粒の砂礫が堆積し、今も河口が塞がれた尻無川を見ることができた。

(7) 黒神岩

地殻変動でこの黒神岩一帯が沈下し海に水没して、その中の巨大な岩だけが水面上に頭を出す結果となったとある。実際、大きな岩が林立して貝殻も付着していた。

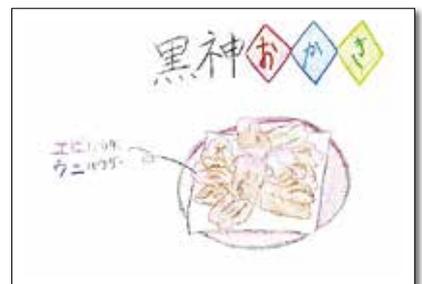


尻無川河口

以上文献と見学をもとに話し合った結果、今回は「あくねの なな 不思議なお菓子」という名前で、七不思議にちなんだお菓子を提案することにした。ひとつ例を挙げる。

例：「黒神おかき」というお菓子を提案する。形は黒神岩を、おかきで再現した。黒神岩は、昔、海のそばにあり、貝殻などの痕跡も残っていることから、阿久根で漁獲されるタカエビやウニをパウダーにして、おかきにまぶすことにした。

他にも、光礁トリュフ・塩田せんべい・足跡もち・岩船タルト・洞窟ドーナツ・尻無川寒天というお菓子を提案した。



考案したお菓子の例（黒神おかき）

## 今後の課題

今回、「あくねの なな 不思議なおかし」のアイデアをまとめたが、本校の食農研究部と共同でこのお菓子の試作を行っていききたい。また、お菓子の開発だけでなく、これを機に多くの人に七不思議スポットを訪れてもらうために、集客イベントなどの提案も行っていききたい。

## 高尾山の天狗伝説

東京・共立女子第二高等学校／神奈川・桐蔭学園高等学校  
高尾研究会  
(小林実莉、武島亜矢子)

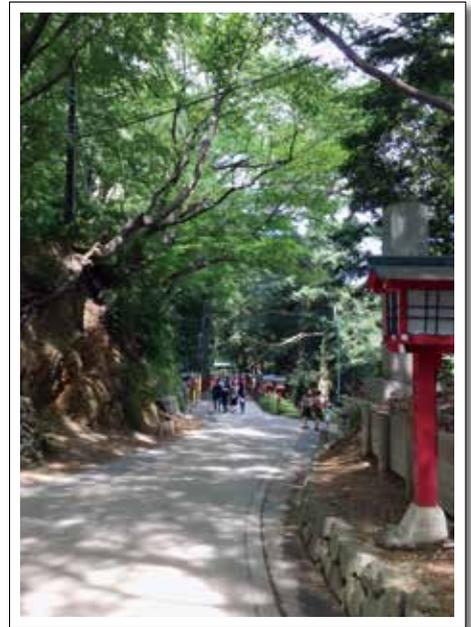
## 応募の動機

学校に貼られていたポスターでこのコンテストのことを知りました。地域の民話を調べてみると、よく街で見かける天狗のお面や銅像は高尾山の天狗伝説に関係するものだとということを知りました。そこで、もっと深く知りたいと思い、高尾山の天狗伝説について調べることにしました。

## 研究レポート内容紹介・今後の課題

高尾山には、「天狗さらい」という民話があります。死ぬまでに一度でいいから高尾山に登りたい、と願う老人が、いつも高尾山に向かって手を合わせていたところ、突然薬王院（高尾山にある寺院）のお堂に姿を現します。驚く僧たちに、大增正が「これは天狗さらいだ」と言い、この老人を自分たちのお勤めへと向かい入れます。この老人は僧たちとお勤めをした後、煙のように姿を消し、その後ずいぶんと長生きしたという話です。私たちは、天狗＝妖怪というイメージを持っていたため、この民話を読んで意外に思いました。さらに、他地域に伝わる民話では、人々に悪戯をするものとして書かれてるものもあります。ここで、私たちはなぜ高尾山の天狗は良いものとして書かれているのか、なぜ地域にこれほど深く根付いているのかを調べることに決めました。そして、実際に高尾山に登り、薬王院の方にインタビューをしに行きました。まず、天狗の成り立ちの説にはいくつかあり、その1つとして有力なのが修験道という宗教に関わるものです。高尾山では古くから修験道の修行が行われており、修行を終えた山伏や修験者と呼ばれる者が里に帰り、修行での経験や得た知識で人々を精神的、肉体的に支えたことから、彼らが天狗として神格化されたという説です。さらに、天狗は修験者たちを護る山の守り神として崇められ、守護神とされています。修験道では不殺生を強調しているので、天狗は自然を守り、人々も守ってくれるというイメージから人々の間で広まっていったものと考えられます。そのようなイメージから、人々は天狗を古くから親しみ、神としてその存在を大切にしてきたのです。実際、高尾山の麓の店には、沢山の天狗の商品が売られており、高尾山から離れたところでも、天狗のお面が飾られているのをよく見かけます。今回、高尾山に登ってみて私たちは、高尾山の自然の豊かさは、人々が天狗という存在を重要視し、大切にしてきたことで守られてきたものなのだと実感することができました。

今後の課題は、1つは天狗の神か妖怪かの存在をもっとはっきりさせることです。天狗は空想上の生き物なので、やはり曖昧なところが多く残ります。他地域の民話の天狗に対するイメージを比較することで、「天狗」という存在をより確かなものにできれば、もっと深く知ることができるかもしれません。また、高尾山の天狗は、人々の自然に対する見方や大切に想う気持ちの表れに関係すると考えたので、今回の天狗の調査を高尾山の自然保護に活かせるような活動をしていきたいと思いました。



高尾山の山道



「高尾山の天狗さま」

愛媛県立東温高等学校

郷土芸能部

（小椋詠亮、山口翔聖、只木克己、大西哲平、渡部良磨）

**応募の動機**

私たちの地域にはたくさんの伝説があることを知っていましたが、なかなか調べる機会がありませんでした。そんなときに顧問の先生がこのコンテストを紹介してくださったので、地域活性化にもつながると思い、夏休みを利用して作品づくりに取り組むことにしました。

**研究レポート内容紹介・今後の課題**

衛門三郎は、松山市久谷地区に伝わる伝説の1つです。

しかし、知らないことも多くあったので、この機会に調べてみようと思いました。

あらすじは、昔、衛門三郎という欲深い長者がいました。ある日、托鉢の僧を弘法大師とは知らず、彼の手に持っている鉢を彼に向かって投げつけました。すると、鉢は八つに割れ、そのあと、八人の息子が次々と死んでいきました。その後、邪心を捨て、改心した衛門三郎は大師を追って四国巡拝に旅立ちました。その時に、衛門三郎が歩いた道が四国遍路と呼ばれるようになったとされています。徳島の焼山寺で衛門三郎が行き倒れになったとき、突然弘法大師が現れ、石に「衛門三郎」と刻み、彼の手に握らせました。衛門三郎は安心して息を引取ったといいます。そのあと、この地方の大守であった河野氏の家に男の子が生まれました。右手を開かないので僧が願をかけました。すると、手の中から「衛門三郎」と書かれた石が出てきました。その石は安養寺に収められ、安養寺は、寺号を石手寺に改めました。

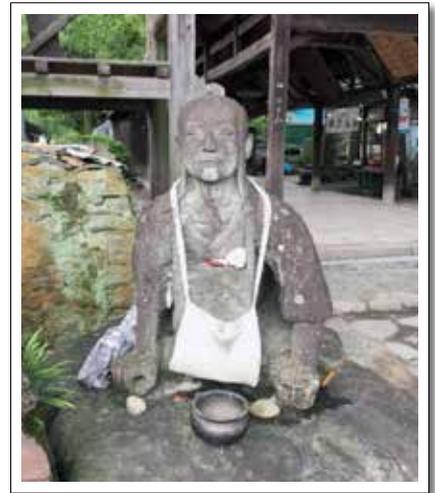
私たちは、この物語について深く知るために、物語に関わるいくつかの場所を訪れました。

初めに、「衛門三郎」と書かれた石を持った子供が生まれたという伝説のある石手寺を訪れました。

境内には、衛門三郎の石像や、安養寺に生まれてきた子供が握っていた石をイメージしたような石の石像など、衛門三郎に関するものがたくさん残されていました。次に、衛門三郎が弘法大師に追いついた場所といわれている文殊院に行きました。文殊院は、弘法大師が衛門三郎の子供の供養とともに悪因縁切御修法をなさった四国唯一のお寺です。ここには弘法大師や衛門三郎の妻などの大きな石像がありました。今では、この寺にはアニメのキャラクターなどの石像もあり、小さなお子さんや海外の人などにも親しみやすくなっていると感じました。他にも浄瑠璃寺や八ツ塚等さまざまな場所を訪れました。

私たちは、お遍路さんにインタビューをしてみました。海外の人にもインタビューをすることができ、海外と日本の宗教的な文化の違いにも気づくことができました。「一度まわってみて四国の歴史を感じる街並みを見たり、四国の方々がとても暖かく迎えてくれたからもう一度回りたくなった」などの声も聞くことができ、違う観点から四国遍路の良さを学ぶことができました。

来年度は、もっと広く、深く、たくさんのことについて調べてみて地域活性化に今回以上に貢献できるように努力していくつもりです。



石手寺の衛門三郎像



久谷の文殊院

## 「鬼」考 ～今昔物語集と民話における～

東京・世田谷学園高等学校 2年  
大和田 一 稀

## 応募の動機

私は元々民俗学に興味はあり、本も数冊読んでいた。進路もそちらに進もうと考えていた。しかし、私は今まで自分の興味ある分野について自ら調査し、それらをまとめ、研究する、というごく基本的な行いもしたことがなかった。それを自ら少し恥じていた。そこで、このコンテストを知り、以前より興味を持っていた分野について研究をしてコンテストに出場することにした。

## 研究レポート内容紹介・今後の課題

このレポートは、主に二つの研究に分かれている。一つ目は、古代日本（平安時代）の民話集といえる「今昔物語集」に登場する鬼を分類し、それぞれの鬼の特徴を把握した上で、当時の賤民と照らし合わせることで、自分が興味を持った、辞書には書かれていない「鬼＝賤民」という言説を検証してみる、という研究だ。様々な説話から鬼の特徴をとってみると、「肉食」、「墓守」、「警察」、「演芸」などを行う点で賤民と鬼が共通していることがわかった。これにより、「鬼＝賤民」という言説にある程度の根拠を提示できた。

二つ目は、一つ目の研究で把握した「今昔物語集」に登場する古代における鬼の特徴と今に伝わる民話に登場する鬼の特徴とを比較するものである。この研究によって、古代における鬼の一つ、「悪しき鬼」が現代では赤鬼・青鬼と鬼婆・山姥の二つに分化していること、古代から現代にかけて鬼の住処が変化していること、鬼の種類の増加、鬼が主に「人を襲うもの」から「退治されるもの」とその立場を変化させていること、などがわかった。これらのことから、人が鬼に対して、古代には畏怖の視線しか投げかけていなかったが、現代の民話となるにかけて、人が鬼に対し憎しみの視線も投げかけるようになったというような、今昔における人と鬼との距離の変化の一端を明らかにできた。

今後の課題として挙げられるものは、まず、二つ目の研究において、鬼の特徴をまとめ上げる際に参考とした民話は特定の地域のものではなく、様々な地域の民話からまとめ上げた、言わば一般的な鬼である。勿論、古代の鬼と民話の鬼とで簡単に比較するのならばこのような一般的な鬼でも良いのだろうが、より正確な比較をするにあたっては、地域ごとに鬼の像をまとめ上げなければならないであろう。

逆の古代の鬼もまた然りである。今回古代の「鬼」像をまとめ上げるために用いたのは「今昔物語集」のみである。しかし、周知の通り古代の説話集は「今昔物語集」だけではない。そして勿論、古代の「鬼」観を探るのであるから説話集でなくとも、物語でも、場合によっては随筆でさえ重要な参考資料となる。古代という時代の古さゆえに、鬼についての全ての資料を集めることは不可能かもしれないが、古代の「鬼」像をできる限り再現したいのならば、それを記したできる限り多くの文書を解析しなければならない。そして私は、多大なる知的好奇心をもって、この事業に従事したい・しなければならぬと強く感じている。



都立中央図書館。今昔物語集や民話などの資料を求めるのに大変役に立った。



今昔物語集に登場する鬼に近い鬼のイラスト

優秀賞

## 地域民話研究部門（個人）

# 河口湖天上山に伝わる『カチカチ山伝説』の真相 ～カチカチ山伝説の発祥地は本当に天上山なのか？～

山梨県立吉田高等学校 3年  
廣瀬 香奈

### 応募の動機

所属していた「社会研究部」の顧問の先生から、コンテストの応募用紙を頂いたことがきっかけとなっています。幼いころから親しんできた天上山について改めて探求してみたいと感じたのと同時に、文学との関わりが深い魅力的な山だということをより多くの人に伝えられればと思い、応募しました。

### 研究レポート内容紹介・今後の課題

私の住んでいる山梨県富士河口湖町には、日本五大昔話に含まれている『カチカチ山』伝説の発祥地と謳われている“天上山”という山があります。小学校の遠足で訪れるなど、この山に触れる機会が多かった私は“なぜ天上山はカチカチ山伝説の発祥地と言われるようになったのか”疑問を持ち、今回調べることにしました。

天上山とは、標高1104mの比較的小さい山です。しかし、富士山との距離が非常に近く、展望台からは雄大な富士山を望むことが出来るため、山梨県の観光スポットの一つとして数えられています。また、展望台の付近には、昔話『カチカチ山』を表現したモニュメントが様々な場所に設置してあります。

カチカチ山伝説は室町時代に成立したと言われ、以降人々の口伝によって各地に広まっていきました。江戸時代初期には「むじなの敵討ち」という題名で本格的に世に知れ渡るようになり、江戸時代寛文期（1673頃）には、赤本の中に収録されている「兎の手柄」という物語が出回りました。そして、私達がよく耳にするカチカチ山は、明治28年（1895）巖谷小波の“日本昔噺”によって出来上がりました。

カチカチ山伝説は昔話という事もあり、明確な発祥地というものが存在しません。新潟や東北地方（秋田県が有力）に、現在のカチカチ山伝説に類似した昔話が存在するようですが、富士五湖地域の中にカチカチ山伝説に繋がる文献はありませんでした。

では、なぜ天上山がカチカチ山伝説と関係があると言われているのでしょうか。天上山のロープウェイ乗車中に流れるアナウンスでは、“天上山は、文学家の太宰治の作品「お伽草子」中のカチカチ山というお話の舞台になっている”と放送されています。この放送が事実であれば、天上山はカチカチ山伝説の発祥地として関係しているのではなく、太宰治の『お伽草子～カチカチ山～』の舞台として関係しているという事になります。

実際に作品の本文中には天上山に該当する箇所が複数存在し、“これは甲州、富士五湖の一つの河口湖畔、いまの船津の裏山あたり”・“あれが富士山だし、あれが長尾山だし、あれが大室山だし”調査を行い地図を製作してみると確かに天上山が当てはまりました。

以上の事から、天上山はカチカチ山伝説の発祥地という訳ではなく、太宰治の作品の舞台であることが分かりました。残念ながらこの真相は殆ど知られていません。そのため今後はホームページやパンフレット等を改良し、カチカチ山の真相を広める活動が必須になると考えています。また、私も継続してこの真相について調査し、カチカチ山と天上山の関係についてより一層の理解を深めていこうと思います。



天上山にある太宰治の石碑



カチカチ山の像と富士山



観光客への取材

愛知県立杏和高等学校 2年  
木村心優

### 応募の動機

「澤様」のことを初めて知ったのは小学4年生、自分の住む地域の昔話を調べてみようという授業でのことでした。そこで興味をもち、小学校、中学校と「澤様」について調べてきました。高校生になった私は、新聞で「地域の伝承文化に学ぶコンテスト」というものがあることを知り、応募してみたいと思いました。

### 研究レポート内容紹介

愛知県稲沢市平和町須ヶ谷では「澤祭り」という行事が行われています。須ヶ谷村をはじめ水害に悩まされた十七カ村を、私財を投じてまで救った清洲代官の澤園兵衛重格を供養する行事です。この「澤祭り」について、なぜ200年以上も続いているのか、昔の「澤祭り」はどのように行われていたのか、疑問に思いました。なので以下の調査を行いました。

- ・当時の村の様子や澤代官の功績が書かれた文献を調べる。
- ・実際に「澤祭り」に参加する。
- ・須ヶ谷の住民の方、澤園兵衛重格の子孫の方にインタビューする。



澤家の方々との写真

### 調査内容

#### 1. 澤園兵衛重格とは

第二代の清洲代官。雨が降るたび洪水に悩まされていた須ヶ谷村をはじめ十七カ村の状況に心を痛み、私財を投げうってまで11年に及ぶ治水工事を完成させた。

#### 2. 水害に悩まされた十七カ村とは

十七カ村と伝えられているが村名はあきらかでなかったため、『平和町誌』『寛文村々覚書』『尾張徇行記』を参考に推測した。

#### 3. 澤様を祀る社、祠

農民たちは、澤様の功績を偲び称えた。そして、主な村々に社を建て、澤様の命日には毎年盛大に祭りを行った。私は、現在でも残っている須ヶ谷の「澤君遺愛碑」。稲沢市中野宮町の塩江神社境内にある「澤園社」、稲沢市儀長にある大福寺内の「番神祠」に実際に実際に行き、調査した。

#### 4. インタビューをする

澤園兵衛の子孫の澤國生さんに話を聞くことができた。神様として祀られている人の子孫と直接会話できるというのはとても貴重で、いい経験になった。須ヶ谷の方々にもインタビューをしたが、詳しくは知らないという人が多かった。そして、詳しい人はもうすでに亡くなってしまったと聞かされたため、昔の「澤祭り」の様子や行事に対する人々の思いは、はっきりとはわからなかった。



澤君遺愛碑

### 今後の課題

今回行ったインタビューでは、詳しく知らないという人が多かった。このままでは、澤様のことが忘れ去られてしまうかもしれない。民話を「伝える」ということの必要性を強く感じた。次回は、「澤祭り」が行われる経緯について、「知らない」と答えた人たちに着目し、なぜそうなったかを明らかにしたい。また、技術的な面での課題も多い。見やすい字の大きさ・色分け・写真の配置などに気をつけて作品作りを行いたい。このような賞を頂けるとは思っていなかったので、本当にうれしい。協力してくれた皆様に感謝申し上げます。

## 六合物語

## ～これを語りて柳田國男を戦慄せしめよ～

高崎市立高崎経済大学附属高等学校 3年  
小杉恒太

## 応募の動機

私の将来の夢は六合村の民話を後世に残していくことです。そこで、今まで調べてきた事がどのように評価されるのか大変気になり、このレポートを制作しました。

六合村には現在、100を超える民話が残っています。このレポートでは、その中から特に有名なものと、語り部の方が大切にされているもの2つを提示し、語り部の方の見解と自身のフィールドワークからその民話が何を伝えたいのかを探りました。

## 研究レポート内容紹介・今後の課題

## 1 「宵の山本・明けの山本」

六合村には「山本」という姓の人が多くいます。しかし、同じ山本でも宵の山本派は正月に門松を立て、明けの山本派は門松を立てません。というのも、六合村には「入山メンパ」という赤松を使用した民芸品があり、正月に門松を立てない家をつくることで、メンパに使用する赤松の過剰伐採を避けようとしたのではないかと考えられます。

これを伝える民話では落人が登場し、前半の軍勢は年明け前に入村できたため門松を立てることができ、後半の軍勢は年が明けてしまったため門松を立てることが出来なかったと伝えています。これが現在まで引き継がれているため、2つの山本が存在していると言われています。



民芸品の「入山メンパ」

## 2 「ホリキリザワの龍」

六合村は非常に滝や川が多く、このホリキリザワも実在します。ここはかなりの秘境地で、到達するためにはいくつもの滝を過ぎ、山道を進まなければいけません。そこには「ケンズリ穴」という小さな穴があり、そこに指を入れると大きな災いと引き換えに雨が降ると言われています。むかし、六合村が飢饉に襲われた際、若い村人がそこに指を入れて、雨と引き換えに龍と死闘を繰り広げたという伝説が残っています。語り部の方はこの伝説を最も大切にしており、発表会などでは必ずこの伝説を語るといいます。この伝説から、今自分が住んでいる地域も祖先が必死に守ってきた土地だということを感じることができます。



高野長英が隠れていた「湯本家」

今回のレポート制作にあたって、民俗学の祖である柳田國男先生の『遠野物語』を不十分ながら模倣した「六合物語」も制作しました。六合村の民話を多く発信していくためにも、今後は発信の仕方にも目を向けていこうと思います。

## 箱根における九頭龍伝説

神奈川・鎌倉女子大学高等部 2年  
石田 瑠奈

## 応募の動機

私はよく小・中学生の夏休みに箱根へ家族旅行していて、箱根神社のついでに九頭龍神社へ三度ほど訪れたことがある。その時にこの神社に龍神様が関係していると、聞いたことがあったがそれ以上のことは何も知らなかった。私の住んでいる茅ヶ崎市の歴史は今まで調べてきたので、県内の他の町のことも知りたくなった。そこで、この伝説についてもっと知識を深めたいと思い、調べることにした。

## 研究レポート内容紹介・今後の課題

まず、私は箱根の地に伝わる九頭龍伝説について調べた。

その昔、芦ノ湖は万字が池と言って箱根権現の御手洗の池と呼ばれていた。

「また毒龍が出て人を食べてしまったそうだ」

ここではそうした恐ろしいことが度々起こり、村中の人々をおびやかした。毒龍は夜になると万字が池の住み処から荒波を蹴立ててやってきては、村の人々に危害を加えた。

そこで古老を中心にみんなで集まり、あれやこれや相談した結果、残酷ではあるものの犠牲者を少なくするために人身御供（ひとみごくう）の娘を差し出して悪龍の機嫌を取ることに決まった。

ちょうどそのころ、箱根の山に万巻上人（萬巻上人）という坊さんが修行に来ていた。

人身御供のことを聞いた万巻上人は村へ下りてきて、娘を生贄に沈めるかわりに、池の底に向かって石段を造らせた。そして祭壇を築き、日夜断食をして祈祷を続けた。

そうすると、渦の真ん中から一匹の毒龍が姿を現すと、静かに上人の前まで泳いできて頭を下げた。

「どうぞお許してください。もう決して悪いことはいたしません」

と、今までの罪を詫びて深々と謝った。

万巻上人はようやく毒龍の罪を許してやり、これからは龍神として万字が池と村を守るようにしなさいとあって、その化身を九頭龍明神とした。それから生贄の話は絶えてなくなり、代わりに毎年三升三合三勺の赤飯をおひつに入れて湖水に沈め、村の安泰を祈るようになった。

本やサイトで伝説について読んでいても臨場感がないのでこのお話の場所である箱根へ実際に行ってみた。

まず、私は箱根神社へ行った。

箱根神社にて参拝をした後、おみくじを引こうとしたところ、多くの種類があった。

その一つに「九頭龍みくじ」というものがあり、表には龍の絵が描かれていた。九頭龍が龍神として今もなお、崇められていることがここからわかる。

次に、私は九頭龍神社本宮へ向かった。

伝説で九頭龍を祀った後、“山々のたたずまいは以前の平穏な生活を取り戻した”とあったが、本宮はまさにその通りの静けさであった。境内の、芦ノ湖側へ行ってみると湖へ続く石段があった。

石段といえば、“娘を生贄に沈めるかわりに、池の底に向かって石段を造らせた。そして祭壇を築き、日夜断食をして祈祷を続けた”という部分が伝説の中にある。

その石段とは、この九頭龍神社の湖に続いている石段のことなのではないだろうか。

今回九頭龍伝説を深く知っていくと、伝説も現実のうちなのではないかと、思った。それは、伝説の中に出てきた様々なものが実際に存在していて、自分の目で見ることができたからだ。

私は、箱根の九頭龍伝説を調べたが、ほかの地域の九頭龍伝説にも興味を持った。もし機会があれば、戸隠神社など、九頭龍の言い伝えがあるところにも行ってみたい。



箱根神社境内



箱根神社境内「龍神水」の九頭龍

# 地域民話研究部門選評

國學院大學教授 花部 英雄

## ■総評

今回「地域民話研究部門」の応募作品を読みながら、数年前に比べ質的に向上しているような印象を受けた。これに間違いなければ、しだいにコンテストの趣旨が理解されてきたように思える。いうなら民話とは何か、その研究、作品化に向けてどのようにすればいいのかの理解が、浸透し定着してきた結果ではないかと考えている。そこで、次年度の応募者の参考のためにも、基本に立ちかえって、「地域民話研究部門」が求めるコンテストの趣旨を再確認し、さらに周知徹底する必要から、以下そのことに触れておきたい。

まず、民話とは「民間説話」の略であるとか、あるいは「民衆の話」であるなどとか、研究者によって語源を含めての定義が定まっていらないが、ただ、学問的な裏づけを持つ対象として「昔話」「伝説」「世間話」を指すということには、おおかた異論はないであろう。「昔話」はいわゆる「むかしあるところに…」で始まり、「めでたしめでたし」で終わる様式性のある物語的な内容で、これには笑話も含まれる。これに対して「伝説」は、神仏や巨人などの出来事や、義経など過去の人物の事件、また、山や岩、池沼など自然物に関わる説明的な話が多い。「世間話」は、日常の事件や人の噂、天変地異や死後・異界・妖怪などの非現実な話である。

この三つの形態の話は、当然ながら話の機能や場、享受者による違いでもある。いまそのことに詳しく触れることはしないが、人間同士がコミュニケーションをはかり、社会生活を円滑に維持するために、この口頭の形態は欠かせない重要なものである。

次に、その民話をどのように研究するかであるが、それには大きく二つある。一つは民話そのものの研究と、もう一つはその民話の活用ということである。前者の民話研究とは、地域における民話の特徴を明らかにすることから始まり、その民話がどのように誕生、成長し、地域的特性を示しているかを調べることである。また、地域を越えて、民話の移動や変化等を比較研究することでもある。

もう一つの民話の活性化については、今回も鹿児島県阿久根市あくねにおける伝説を、菓子作りに生かそうとする試みの作品があるが、民話を地域の活性と結びつけて利用するのも、その一つである。地域の遺産である

民話を、地域住民や他地域の人々に向けて発信するなどの活用は、民話のこれからにとって大切な役割といえる。こうした趣旨を理解した上での作品作りを提唱したい。

ところで、念のため今年度の審査基準、および評価のポイントを示しておく。審査は次の基準で行なっている。第一に、民話の採集地や伝承地を訪ね、民話の地域環境や生活上の意味を理解するなどのフィールドワークを行なっているか。第二に、そのために必要な文献や資料などを精査し盛り込んでいるか。第三に、そのようにして得た材料を十分に分析・考察した結果を、自分の言葉でまとめているか、ということが中心となる。

## ■団体の部

### 優秀賞

「おたちきさん～なぜ、五百年以上祀られ続けてきたのか?～」

愛媛県立西条高等学校

地域・歴史研究部

石川源太夫の最期が「伝説じみている」という素朴な疑問から、その解明に向けての研究がスタートする。知勇兼備の人望のある石川源太夫がなぜ暗殺されたのか、また、死後に地域住民により神として二か所で祭られているのはなぜか、といった疑問を提示しながら、その真実を究明しようとする方法は明晰で惹きつけられる。そのために豊臣秀吉の四国攻めや、当時の四国の政治的状况を踏まえながら、蓋然性の高い結論を追究する。

ここまででいえば、これは歴史研究になるが、実は石川源太夫は「おたちきさん」の神として、地域住民に祭られており、その慰霊祭に参加し調査を行う。五百年を経過しても、なぜに人々に信仰されているのか、この究明は伝承研究のテーマでもある。現在、慰霊祭に取り組む人々の意識や、地域と神社との現実的な関係など、総合的に調べて明らかにするのが民話研究である。

### 優秀賞

「民間に根付く妖狐妖狸伝」

群馬・高崎商科大学附属高等学校

社会部特選・特進男子

狐狸にまつわる伝説を、八人のチームワークによるフィールドワークを中心に実証的に追究した研究レポートである。茂林寺の文福茶釜しょうじょうじや木更津の証誠寺の

狸話を实地に訪ね、それに言及した文献等を確認する。続いて、郷土の群馬県の狐狸伝説を調べ、伝説の背景にある自然や動物への民間信仰が基にあることを明らかにする。手堅い構想で、説得力のある内容である。

先行研究の一例に柳田國男の「動物援助」を取り上げているが、狐狸の化かし合いや動物憑依の事例は全国に数多くあり、また、さまざまに研究されている。今後、伝承研究に限らず、心理学や精神医学などの研究にも注目しながら、さらに实地検証を重ね、研究を深化させていきたい。

### 優秀賞

「あくねの なな 不思議なおかし」～阿久根の七不思議を調べて～」

鹿児島県立鶴翔高等学校

郷土芸能同好会

衰退する地域の現状を、何とか盛り上げるためにも、「阿久根七奇」の伝承をもとに菓子作りへと結びつける発想はユニークで面白い。そのために現地調査をし、伝説の成り立ちや実態を確認しながら、菓子の名称や製法、外形に生かすという工夫は、地域の文化遺産を地域活性へと繋げる試みであり、町のお菓子屋さんとも協力して、ぜひとも実現にこぎつけて欲しい。

伝説を「町おこし」に利用する試みはこれまでも各地で行われているので、他の地域の事例も調べ、それらの参考にできる点を取り入れながら、阿久根の特徴や独自性を強くアピールできるよう、いっそう研究を深めてもらいたい。

### 佳作

「高尾山の天狗伝説」

東京・共立女子第二高等学校／神奈川・桐蔭学園高等学校  
高尾研究会

高尾山の天狗について調べる前に、研究書を通して天狗の歴史やイメージなどを事前に調べてから、高尾山に登り、薬王院の僧から天狗について、山との関係からのレクチャーを受ける。それらを通して天狗とは何かについて、改めて考え学んだことをまとめるという構成で、民話のフィールド研究の模範といえる内容といえる。

妖怪怪異のメジャーである「天狗」については、これまで多くの著述がある。その意味では、個性的で独自性を研究で示すのは難しい。本研究は概説的な内容としては問題ないが、オリジナリティーや新味を提示するといった面からすると物足りない。ここから独自

の天狗研究に向けて十分な策略を練る必要があるかもしれない。

### 佳作

「衛門三郎伝説」

愛媛県立東温高等学校

郷土芸能部

四国八十八ヶ所巡りは弘法大師と「同行二人」とされるが、その始まりが弘法大師を邪慳にした衛門三郎が、自分の行いを悔いて大師を追いかけたことから始まるという伝説は、地元以外ではあまり知られてはいないだろう。その愛媛県松山市久谷の「衛門三郎伝説」について、伝説に関連する寺社や旧跡、遺物等を訪ねながら、改めて四国八十八ヶ所巡りのある地域を見直し、伝説研究の意味を理解したという事例報告である。内外の遍路さんにインタビューするなどして、四国遍路の意義を確認したという感想は貴重である。ただ、衛門三郎伝説の始まりについてと同時に、現在に至る伝説の成長についても、ぜひとも明らかにして欲しかった。それは四国遍路の現代的意義にも関わる重要な視点でもあるからである。

### ■個人の部

#### 最優秀賞

「『鬼』考～今昔物語集と民話における～」

東京・世田谷学園高等学校

大和田 一稀

本作品は、今昔物語集や昔話などに登場する鬼について、それぞれの説話の鬼の属性を分析し、それを社会的階層の反映および寓意といった見方から解釈する。鬼を妖怪や怪異における異界の存在のモノとするのではなく、現実社会の支配関係や制度面からとらえる発想はユニークである。研究の方法にいくぶん荒削りな部分もあるが、その点を説話の背景をなす歴史社会に対する確かな理解や認識がカバーしている。鬼マニアの歴史社会学的立場からの意欲的でハイレベルな研究と評価したい。

ただ、本研究にも取り上げられている用語の「まつろわぬ民」としての鬼の側面への踏み込みがいくぶん弱い印象を受けた。歴史的な史料や神話伝説を通して、その人々の実態を明らかにしていきたい。同時に「土蜘蛛」と呼ばれ、芸能や図像などに登場する、それらの分析を踏まえ、いかに忌避され差別されてきたかの実態の究明を期待したい。

## 優秀賞

「河口湖天上山に伝わる『カチカチ山伝説』の真相  
～カチカチ山伝説の発祥地は本当に天上山なのか?～」

山梨県立吉田高等学校

廣瀬 香奈

太宰治の戦時中の作品『お伽草子』に描かれた「カチカチ山」の舞台は天上山であるが、これは創作であるからで、普通には昔話は特定の地域に関するものではない、といった原則論を確認する。というのも、この執筆者も最後に「天上山カチカチ山伝説の発祥地という訳ではなく、太宰治の作品の舞台である」と述べているからである。

ところで、この結論は、この作品の評価とはあまり関係しない。この作品は、文学作品を真に楽しみながら真面目に作品の舞台を追究し、かつ、その研究をカラフルにみごとにビジュアル化したパンフレットを作り上げたことに尽きる。ここまで読む人を意識しサービスするのは、何か本物の太宰の読者へのサービス精神に通じるものがある、心温かくなった。

## 優秀賞

「澤様と人々の思い」

愛知県立杏和高等学校

木村 心優

この作品は、今から二百年前に、愛知県西北部の水害常習地克服のために献身の活躍を成し遂げ、ついに神に祭られた澤園兵衛の偉業をたたえたレポートである。著者は小学校四年生の時にこの人物を知り、現在まで長い時間をかけて資料を収集し、また現在唯一行なわれている須ヶ谷地区の「澤まつり」取材し、インタビューを交えるなど、さまざまな角度から人物の功績を顕彰してきた。

ただ、澤代官の偉業についての客観的な記述について、これまでの記録資料に基づくだけでなく、自分なりの視点を加味して再構成した形の成果の提示を工夫することも必要であろう。現在はかつてと比べ大きく農業が後退している中で、祭や澤代官が地域の住民にどのように受け入れられているかについて、一族の動

向や祭に関する中心的な人物だけでなく、広く地域住民の意識を反映させた形の追究も期待したい。

## 佳作

「六合物語～これを語りて柳田國男を戦慄せしめよ～」

高崎市立高崎経済大学附属高等学校

小杉 恒太

群馬県北西部の山あいの集落、六合地区の伝承民話を、サブタイトルにあるように『遠野物語』に匹敵するものとして喧伝<sup>けんでん</sup>、普及させようとする志は、純粹で歓迎すべきものである。本研究はそのための第一歩と言えるかも知れない。しかし、志はよしとしても実態が伴わないのでは寂しすぎる。そのためには六合地区の地域的、生活的環境の反映した独自の昔話をもっと発掘して、その特性を生かした説明や紹介を心がけたい。

巻末に示された序文や用例は、『遠野物語』を模倣して作成したものといえるが、模倣はいくら完璧であっても二番目以上にはなれない。単なる模倣ではなく、六合地区独自のものから出発した試みの工夫をぜひとも求めたい。

## 佳作

「箱根における九頭龍伝説」

神奈川・鎌倉女子大学高等部

石田 瑠奈

九頭龍伝説の解明のために、実地を訪ねるフィールドワークを重ね、実感実証に基づく成果を示した報告である。実際に自分の足で歩き、その環境を体で感じ取ることが伝承研究の基本である。それをもとに、さらには他と比較対照することで、よりよくその特性を理解し報告することができるはずである。

全体を通して、現地レポートといった内容であるが、続いて、万巻上人のことや、九頭龍がどうして神社や寺院とも関係するのか、といった文献資料の研究にも手を広げ、歴史的な展開についても調べていきたい。その結果、「九頭龍とは何か」といった大きな問題に迫っていくことができるはずである。